

ハル力第3章―母と娘と子と

あらまし

突然知らされた娘の妊娠。母は娘のことを想うと、どうして
も出産させられないと言い、中絶手術を決断する。一方、妊娠
した娘は、そんな母が子を想う愛情と、まだ見ぬ我が子を想う
愛情の、二つの愛情の間で必死にもがきながら、手術日を迎え
る。手術中、我が子を見せてくれた幻想的な世界。そこには、
子が親を想う気持ちと親が子を想う気持ちがありありと、
映し出されていた。

娘の妊娠

平成24年7月31日。私は市販の妊娠検査キットを持ち、
自宅のトイレへと向かった。その妊娠検査キットの説明書には、
結果は10分〜15分で出ます。99%正確だと書かれていた。
結果は、「陽性」。結果が出るのに、10分もかからなかった。す
ぐにお付き合っていた彼に妊娠していることを、メールで報
告した。またそのとき、両親にもメールで妊娠したことを報告
した。

私は、とりあえず、その日の仕事を夕方に切り上げて帰宅し、
母親に自分が妊娠したことを告げた。母は第一声、「どうすん
の、あんた。おろさなアカンやん、分かってんの」と言った。このと

きはまだ、私はその彼と結婚しておらず、先に子どもができて
しまったのだ。しかし、私の両親が彼の存在を知らなかったわけ
ではない。彼のことを嫌っていたわけでもない。私は現在、24歳。
デキちゃった婚で一家を騒がすような歳でもなければ、結婚前
に妊娠するという、近年の社会の風潮に、母親の理解がなかつ
たわけでもない。

では、なぜ母は、第一声からそんなことを言ったのか。それは
月日をさかのぼって、同年5月のことだ。お付き合いしている彼
と、いずれ、「結婚」ということをお互いに意識し始めた頃のこと
だった。私には、今後、彼や彼の両親とお付き合いしていく中
で、どうしても心の中で引つかかっていたことがあった。それは、
子どもである。私は数年に亘って睡眠導入剤を毎晩服用してい
ること、また、精神安定剤を日常的に服用しているため、薬に
よる胎児への影響を心配していた。

もちろんお付き合いを始めた当初は、薬による影響や、子ど
もを産むことに対して深く考えることもなかった。しかし、お付
き合っていく中で、自分の病気や、現在の様子を彼に打ち明
けていく内に、ふと思ったのだ。「もし、この人と結婚して、子ど
もが欲しいと思ったとき、私は妊娠しても今の薬飲めるのかな」。
なんでこのときそんなことを急に思ったのだろう。今となつては、
後に自分が妊娠することを分かっていたのかと思うくらいだ。

私は、通院している心療内科の医師に、「結婚して、子どもを
持ちたいと思ったとき、胎児にこの薬は大丈夫ですか」と尋ねた。
すると医師は、こう言った。「この薬は胎児には良くありません。

あなたの年齢で本来だったら、かなり少ない確率だけど、奇形児が生まれる確率が高いでしょう。また、不妊症も十分に考えられます」。その話を聞いて、半ば覚悟していたが、やはりショックだった。私はまだ24歳。周りはデキちゃった婚や、2人目、3人目を妊娠したとSNSサイトで報告しているのをよく目にする。確かに、各々家庭で大変なことはあるようだが、どれも結婚や出産に向けて、順風満帆な様子が覗える。でも、私は？

単なる被害妄想に過ぎないかもしれないが、初産を心待ちにできないこと、簡単に夫婦のペースだけでは妊娠できないこと、一番に、彼にもこの現実を一緒に背負ってもらわなくてはならないことがショックだった。その日の診察で医師が言ったことを、その夜、彼に正直に告げた。彼は同い年にして私の病気に深く理解を示してくれて、「子どものことはこれから一緒に考えていこう。不妊治療だつて一緒にやればいい」と言ってくれた。その言葉を聞いて、医師の言葉が一瞬にして消えた。いつか、結婚して子どもを持つとき、私たちはどんな子であっても、大切に愛情をたっぷり注いであげようと約束した。

そんな一連の出来事を両親に話し、彼にそんな一面があったことや、私の病気に對しての理解に、感謝や信頼、彼に對していろいろな感情が湧いたようだ。そんな彼に對し、「そうか。いろいろ考えてくれるんだな。今の医療は進歩してるから、きっと大丈夫」と言った父親の言葉からそのような様子を感じた。ただこのとき、母だけは、「あんた、自分の病気のこと言ったん。なんでそんなこと結婚する前から言ったん。あんたのこと重荷になっ

たら、かわいそうやん」と言っていた。

私は、母の言葉を聞いて、このときは私のことを守るための言葉とは知らず、「なんでそんなこと言うの」と勝手に傷ついていた。7月に入つて、そんな矢先の妊娠。母のこの言葉の意味がようやく分かった。

私は、妊娠したことを母に告げて、「おろさなアカンやん」と言われた瞬間に、医師の言葉を思い出した。しかし、私はその事実を受け入れることができず、「産婦人科の先生と心療内科の先生に大丈夫と言われたら、やっぱり産みたい」と涙を流し、体が崩れ落ちるように、床に手をつけて母に向かつて懇願した。母は、「はるか、そんなことじゃないねん。たしかに、あんたが健康やつたら、ママもなんにも言えへん。先に妊娠したつて、今の時代ちつとも不思議なことちゃうし、おめでとうつて素直に言える。でもな…」といった、やりとりをして、母と一緒に産婦人科に向かった。

診察室に母も同席し、私は母が横で見守る中、エコー検査を行った。ベッドに横たわる私。自分の子宮がモニターに映し出される。その映像を見ながら、かつて私を妊娠したとき、母はどんな思いだったのかと、私はそんなことを思っていた。母は元々、結婚後も子どもができてにくい体質だと婦人科医師から言われていたと聞いたことがある。そんな母の妊娠中の話を聞く限り、きっと父と一緒に喜んでくれたのだろうと思った。しかし、私はこのあり様。母はこちらを心配してか、眉間にシワを寄せ、表情は曇っている。エコーではまだ認識できないよううで、内診に移った。

やはり結果は陽性。お腹の子どもは5週目と1日だった。

この先どうしたらいいのかという不安。本当に妊娠していたという事実。産めるのか、やはり無理なのかといろんな感情が入り混じり、医師の話をよそに、私は泣いていた。隣にいた母は、医師に、「この子、精神疾患で薬を毎日飲んで、心療内科の先生にも妊娠したらダメって言われてるんです。だから、早い内におろして下さい…」と言い、最後に私に向かって母は、「もういいよね」と言った。私は、何も考えられなかったが、それが正しいのだろうと、ゆつくりと上下に頷いた。もはや、意見する力もなければ、現実を飲み込むのに必死で、自分の判断なんてできなかった。

24年間生きてきて、もちろん反抗期には母に対して口答えもした。親の言うことを受け入れられなかったことだって、たくさんあった。でも、この歳になると、母は私のことを想って、時に厳しく手を差し伸べてくれたことを十分に理解しているつもりだ。ということは、母親の判断はきつと正しいのだろうと思い、頷いたのだった。

母の話を聞いた産婦人科医師は、「そうだったんですか。それはこちらとしてもなんとも言えないので、一応、中絶手術日の予約だけして、それまでに心療内科の先生の話次第で取りやめでもいいので」と言った。診察が終わり、続いて、中絶手術の日程予約のために別室に移った。そこは病院に設けられたカウンセリング室で、看護師と母と私の3人。手術当日の流れや、手術には全身麻痺させる強い麻酔が使われること、費用や後遺症につ

いての話が淡々と流れている。そんな中、普段から子どもと直接関わるような仕事をしていて、子どもが大好きな私は、「こんなに子ども好きな自分が、よりによって、自分の子どもをおろすことになるなんて」と思っていた。

続けて、自分がそんな状況置かれていながらもかわらず、「この看護師さんはどんな気持ちでこの説明しているんだろう。私のこと、簡単に命を粗末にする人だと思ってるんだろうな」と思い、「私はそうじゃない、それは違う」と、この期に及んでまで、自分を擁護するようなことも考えていた。また、それとは反対に、「どうせ、お腹の子は産まれる運命にないんだ。もう、どうにでもなれ。子どもがいなければ、このまま薬も飲めるし、風邪ひいたときだって大丈夫」と、そんな捻くれた感情が、次から次へと出てきてしまう。

今となれば、そうすることではか、お腹の子どもを諦めきれなかったのだが、そのときは、そんな自分本位のことばかりを頭の中で巡らし、こんなときまで自分のことしか想えないなんて、私はなんて卑怯なんだろうと思った。

度重なる自分との対談

中絶手術の予約を済ませ、産婦人科から戻ると、母が父に全ての内容を私に気づかないところでメールしていたのか、帰宅したときには、父は笑顔で、「お疲れさん」と言った。そんな父の様子に母は、「パ、パ、メール見てないの。この子中絶するねんで。もう手術の日を決めてきた」と言った。父は、「知ってるよ。ママも

「ご苦労さん」と私を問い詰めることはなかった。父からは、「人生にはどうにもならないことがある。自分のことを決して責めずに、お前ができる限り、精一杯のことをお腹の子にしてやれ。今回のことは仕方がないとは簡単に言えないけど、どうにもできないだろ」と言われた。

仕事から戻った彼からも連絡がきた。「体調は大丈夫？俺はどんな子が生まれたかっていい。一緒に育てていきたい」と言われた。彼の言葉がまた私を困惑する。私だって、できることなら産みたい。でも、お腹の子どものために、自分たちのために、お互いの両親のために、どうしたらいいかわからない。私は、しばしの沈黙の後、「ごめんね。もう親と先生との間で、今回は中絶することになった」と告げた。彼は電話越しで泣いていたように声をずいぶんと震わせ、「そうか…でも、ちよつとだけ待って。後でまたすぐ連絡する」と言い、電話を切った。

彼に診察内容や、母と医師との診察室でのやりとりを全て話すと、彼に話すことで少し自分でも現実を理解し始めたのか、いろんなことが頭の中を巡った。

「障がい児だから産めない？じゃあ、普段私が障がいをもった子どもと遊んでいて、素直にかわいいな、この子大きくなつたな、と子ども達の成長を感じて、彼らを心から愛おしく思う感情は偽物なのか。他人の子どもだから、そう思えるだけなんて、自分はなんて偽善者なんだ」

「彼の周りの友達は、デキちゃった婚で、例え裕福な生活ができなくても、しっかりと働いて父親として頑張っているの

に。私が薬を飲んでいたらばつかりに、彼にこの歳でそんなことを考えさせなくてもよかつたのに」

「確かに産みたい。薬を飲んでることでも不妊とも言われていた矢先にやってきた、この命。やはり簡単に諦めきれない。でも、産み落とされた方がいいが育てられるのか。周囲からの反応や期待を過剰に気にしてしまう私の性格。きつと、周囲からの好奇心な視線を感じて何も思わないなんて絶対にないだろう。もし、半身不随で寝たきりだったら。心臓疾患で入院生活ばかりだったら。指が6本生えていれば、今の医療では切断できることを知っている。でも、指も手も、そもそも何もなかつたら。」

と言つても、やはり自分の子どもは可愛いだろうし、愛情も沸くだろう。この子を育てるのに、ただだけお金がかかろうが、体力的、精神的にも子育てに苦労しようが、自分たちが若い内はなんとかなるだろう。自分たち家族が生きている内は、一生子女どもの介護だつてなんだつてする。でもやがて、歳の順に死んでいくとしたら、その後この子はどうやって生きていくのか。生きていけるだけのお金やステージを私たちは用意できているのか。やがて老いていく私たちは子どもに何ができるのか」

そんなことが頭の中をずっと巡る。自分を肯定したい気持ち。でも、私は今、自らの判断で一つの命に勝手にピリオドを打とうとしている。それが、正しいのか、否か。もちろん、母には本当の気持ちは伝えられない。母だって、少なからず悩んだらう。

私の気持ちと、一つの命を比べることさえできなかっただろう。そうやって一人で考え込んでみると、やはり不安ばかりが募り、たちまち、「後で連絡する」と言った彼に、自ら電話をした。

そのとき、ちょうど彼は、自分の両親に、私が妊娠したことや、中絶すると決めたこと話したようだ。彼の両親は、「生まれてから、仮に交通事故に遭って半身麻痺になって、そこから障がい児の親として生きていく場合だつて十分にある。なのに、生まれる前から…。もう少し、今宿った命をもう一度二人で考えて」と言ったそうだ。私の感情はますます混乱した。自分の気持ちを代弁しているような言葉をかけてくれた彼の両親、一方で、私よりも私のことを想っていて、理解してくれている、自分の両親。もはや、自分の意思なんてない。他人に委ねることによって、妊娠した自分の罪悪感が少し薄れていく。

親が我が子に寄せる想い

電話の後、数時間経つてから、彼の両親が言ったことを母に告げると、「その言葉は大変ありがたいけど、はつきり言って、男親の立場と、女親の立場では違う。悪いけど、ママの考えは変われへん」と言っていた。続けて、

「なんでさ、あんた自分の身体を守られへんかったん。妊娠したことに關しては、一人が悪いと思う。でも、あんたは、いずれ結婚して妊娠したら、奇形児が生まれる確率が、普通の20代の子たちに比べて高いって初めから言われてたんやろ。彼に、いくら口頭で自分の病氣のことを話したとして

も、彼が100%理解できるわけないやん。自分の身体のことを一番解つてるのはあんたやろ。ほんまに、あんたがアホ過ぎるわ」

と言った。母がここまで言うのには理由があつた。母は、総合病院の小児科で、院内保育士として十数年間勤務しており、ここでは植物状態の子や、重度の脳症の子など、たくさんの子どもたちと、その子たちに毎日付き添う母親がいる。その中で障がいをもつた子どもを育てるといふ悩みや、日々の不安や鬱憤を聞くのも母の仕事であつた。

さらには、私には近い親戚に、ダウン症の子どもがいる。この子は、心臓疾患を患いながら生まれ、最初の一年間は心臓や肺の手術が数回に亘つて続き、入院生活の中で度重なる緊張とストレス。その母親はその子が生まれた瞬間、愛おしいとなんて少しも思えなかつたと言っていた。どこも自分たちに似ていない。将来を考えると不安しなくて、いつそのこと一緒に死んでしまおうとまで思つたらしい。そんな話を聞いて、母はやはり、障がい児を持つ母親の苦勞を身近に感じる分、障がいに対して無知である人よりか、はるかに育児の大変さを理解しているように、自分の娘に同じ思いさせたくないという気持ちが強いようだ。

中絶手術は一週間後。産婦人科医師からは、その間に心療内科医師に出産できるかどうかを確認するように言われていた。私は通院している心療内科に事情を伝え、一番早い日にちで予約を取った。

そして、妊娠したと分かつて以来、今まで、単なる胃腸炎だろうと思っていた体調の変化が、悪阻(つわり)だったと分かり、毎日吐き気にうなされていた。なんにも食べていないのに気持ちが悪く、吐き気、胃痛、不快感。私は妊娠しているんだと自覚せざるを得ないことが怖くてたまらない。産婦人科の初診時に撮ったエコー写真に写る、たった1センチにも満たない我が子。その、たった1ミリの小さな球体がこんなにも自分の身体を操るとは。悪阻で、ご飯を食べる気にもならないが、不思議なことに、「何か食べなきゃ」と勝手に本能が働く。食の好みも随分と変わっていった。

毎晩服用している睡眠導入剤。この、たった6錠を飲んでいくのに、ものすごく抵抗があった。一錠ずつ飲み込む度に、「こんな薬を飲んでいるために、産んであげられない」、「病気になるければ、今だつて薬を飲む必要がなかったのに」と、随分と過去をさかのぼっては、「それでもあのかきはそうするしかなかった」と、過去の自分と幾度となく話し合いを重ねた。そして、まだ全然大きくないお腹を擦りながら、我が子のことを思い巡らす。母性本能というものは、本当に不思議である。

心療内科での診察日を迎えた。その日は診察室に、初めて母親も同席した。かれこれ4年近くその病院に通院しているのだが、心療内科は、一般的な内科での診察のような感じではなく、職場での対人関係や、家族との話、その日常生活で起こる体調の不具合などについて医師から質問されるため、母親には聞かれないこともあった。でも、今回は違う。「悪いけど、やっぱ

り心配やし、ママも自分の耳で直接聞きたいから、一緒に入ってもらいたい？」と聞かれ、「私も自分じゃ何聞いたらいいかわからなくなりそうだし、先生が言ってることを上手く理解できそうにないから、いいよ」と言った。

やがて順番が回ってくると診察室に入った。私は下をうつむいて、「先生、私、妊娠してしまいました」と一言だけ告げた。続けて母は、「実は以前娘から、今の薬を飲んでると胎児に良くないって聞いていたので、もう、産婦人科には中絶手術するって言ったんですけど、この子がどうしても諦められないって言うんで…」と話した。すると、

「やはり、今の薬は赤ちゃんには良くないですね。だいたい3、4か月くらいかけて胎児は形成されていくんですけど、この薬は脳に刺激を送って症状を沈めていて、神経に直接関わっているんですよ。だから、どうしてもその神経を伝って子宮に行ってしまうんですよ。今回だと奇形児が生まれる確率がやはり高いかなあ。中には、薬を服用しながら妊娠された方もいますけど、安易に大丈夫とは言えませんね」

と医師は言った。私はその話を聞いて、「もう仕方がない」と中絶手術の覚悟を決めた。しかし、一方で、少し安堵したのも嘘ではない。正直なところ、これからの妊婦生活が不安だった。薬のない生活。たとえ医師の言う通り、妊娠した途端に、自分にもなんとなく薬を受けつけない気持ち働いたように、薬を飲まなくても良くなったとしよう。でも、産んでからは？

生まれてすぐに異常が見つかり、我が子が死ぬか生きるかの殺伐とした入院生活。私の精神状態は、産後どこまでやっていけるのだろうか。彼は精一杯仕事をするために家を空けるだろう。入院費や家族を養っていかなくてはならない。だとすると、24時間、つねに子どもと接するのは、他でもない私だけ。健康に生まれた子の母親と悩みも共有できない、とそんなことが先走って不安だった。

心療内科での診察の様子を彼に報告した。彼は、この日までの数日間で何かを感じたのか、「やっぱり、今の命を大切にしたい」という気持ちは変わらないけど産むのは、はるかだから。今の状況で母親になるっていう心境や、身体への負担は男の俺にはわからない。一方的とかじゃなく、いい意味ではるかか決断に任せると言われた。私は、「今回はやはり中絶する」と思い切って告げた。彼の反応は、「そうか」と、彼自身にもどこか、一つの命に自分たちの手でピリオドを打つという覚悟がようやくできたような様子だった。手術は4日後。その間も、もちろん悪阻は変わらない。お腹の中で我が子は生きている。

勤務先には伝えなかった。仕事中は気が紛れるのか、不思議と悪阻も和らいだ。ふと仕事が一段落すると、また気持ち悪くなるが、誰にも悟られまいと、お腹が痛いと言って、トイレに駆け込んでいた。

仕事から帰宅してからは、父が換気扇の下で吸うタバコの匂いや、母が作る晚ご飯のおいしそうな匂いにも反応して気持ち悪くなり、私だけ別室で食べていた。どうせ産まないなら、妊娠

前のようにお酒を飲んでやろう…と思っていたが、もちろん体が受けつけない。そんなことが重なるたびに、ここに命があるんだと、お腹をさすり、感じさせられる。

私の妊娠が分かつて以来、初めて彼の仕事が休みの日、彼は、私の両親にきちんと挨拶をしたいと言い、家にやってきた。もちろん、私の両親に対する謝罪だ。本当は、彼の両親も同じ日に、私の両親に挨拶したいと申し出ていた。彼の両親はしきりに、「妊娠させたのは男だから、こちらが100%悪い」と言っていたが、私の両親は、「もつとお互いに慶ばしい席でお会いしたいから」と言つて、身を引いてもらった。しかし、母の本心は違った。「男親は謝罪したつて、手術費用を出すつて言つたつて、結局、体に傷が残るのは女の方だし、謝つてもらつて気が済むとか、そういうふうにして欲しくない」と私に涙しながら強く言っていた。

そんなやりとりが母との間であったことは彼には話さず、父と母が並び、テーブルの反対側に正座をして私と彼が座つて、彼は口を開いた。「この度は自分の認識が甘かったために…」と話した。続けて父は、「お互い大人だから、妊娠に関してはどちらが悪いとかではなく、お互いの責任だ」と話した。そして、「お互いに、反省する点はもちろんあるけど、二人とも成人しているし、これからはきちんと考えなさい。世の中には、どうしようもないこともある。命をそんなふうに言つたらいけないけど…どうしようもないと、ぼくも思う。そして、このことを決してお互い責めすぎないこと」と言つた。

続けて母は、「今回のことで、きちんと責任とって絶対結婚しなきゃとか、無理に思わないでね。情で結婚するっていうのもおかしい話だから」と彼に向かって言った。母の言葉を聞き、私は少々寂しい気にもなったが、その通りである。私や、彼個人の未来のことを考えたとき、二人が情で結婚なんてしても、きつとお互いの両親とも素直に祝福できないだろう。私たちだって同じだ。罪の意識からお互いを縛りあげた結婚生活なんて送りたくない。

最初で最後の手紙

手術の前日。彼は仕事の後に私の家に来た。最後に中絶手術における同意書を記入するためだ。中絶すると決めてからも、お互いの気持ちとして、すぐにサインすることはできなかった。私の名前と彼の名前。もちろん、それぞれ違う苗字の印鑑が押される。私は、なんだかその瞬間、二人の空間を超えて、もっと違う次元にいるような感覚だった。「苗字も違う、ただの男女が勝手に子どもを作り、今、またしても勝手に一人の命を奪おうとしている」。家族や我が子、両親の結晶なんて言葉を使えば、とても美しいものに思えるが、私たちはそんな言葉を絶対に使つてはいけない、と思っていた。

サインを終えると、彼は手術に伴う費用の全額を封筒に入れて、私に差し出した。しかし、私は断った。ここで私もふと我に返り、自分の子どもだから、私もいくらかは支払いたいと言った。そんなことですか、もうすぐこの世から消される小さな命

に償うことはできなかった。

そして、もう一度エコー写真を彼と見返し、お互いにお腹の子どもと心の中で会話をした。彼が帰るとき、私のお腹を擦りながら彼は、「一週間ありがとうね。また、必ず会おうね」と言った。続けて私も、「本当にありがとう。一週間よく頑張ってお腹に引ついていてくれたね」と言った。

彼が帰宅して一人になった私は、お腹の子どもへ手紙を書いた。自分の気持ちを整理させたいわけじゃない。なんだか本当に、子どもと会話ができるような感覚に満ち溢れていた。

今回は、私たちの勝手な事情であなたを産んであげられなくてごめんね。でも、この一週間私たちは本当の親子だったように思います。妊娠が分かってからは、あなたを一つの命として考えることができず、全部大人の事情で物事を進めていました。

それが、週の後半には、寝る前にあなたに毎日語ったね。彼のいいところや、私の両親や彼の両親のいいところをたくさん伝えていましたね。知らず知らずの内に、もしあなたが生まれてきたら、こんな人たちがあなたのことを待っているよ、あなたの周りには愛情が溢れた人ばかりだよ、とそんなことばかり話していましたね。

あなたのおかげで、命の大切さを知りました。自分が良くも悪くも映しだされ、たくさん戸惑いもあったけど、そんな自分に出会えたのもあなたのおかげです。また、もし会えるなら、もう一度私たちの元に来て下さいね。決して、

今回のあなたの命を無駄にはしない。これから私たちは、今後あなたをもう一度迎えることができるように、環境や私の身体、心の準備など、きちんと整えて待っています。

そして今度は、私もあなたも家族や友達みんなから、「おめでとう」と祝福してもらおう。それまで、もう一度お空に帰って私たちのことを見守っていて下さい。私は、もっともっと強くなつて、もう一度あなたのお母さんになりたい。

ありがとう、また会おうね。

と、スラスラとペンを走らせ、自分を偽善者だと散々責めていた気持ちも和らぎ、このときやつと、一人の人間として、我が子に対する感謝の気持ちでいっぱいだった。

幻想的な世界への旅

とうとうやつてきた手術当日。朝9時に、母と一人で産婦人科に向かった。彼も立ち合いたいと申し出たが、「こういうことは女同士の方がいいから」と言つて、断つた。

受付では、「今日はどうされましたか」と何事もないように聞かれる。私は、「今日9時から中絶手術をお願いしているんですが」と言い、同意書と費用を提出すると、淡々と事務処理に移つた。受付の職員は、同意書に記入漏れがないかなどをていねいに確認し、「では、お名前をお呼びするまでイスにかけてお待ちください」と、まるで、中絶手術なんてちつとも珍しいことではないかのような、素っ気ない対応だった。

看護師から名前を呼ばれ、一人で診察室に入った。もう一

度エコー写真を撮り、位置や大きさを医師は確認した。初診時は、まだエコー写真に写らず、内診でしか判断できなかったが、一週間経ち、もうはつきりとエコーだけでも画面に映る。そして、1センチに満たない大きさだったのに、このときは1センチを少し超えていた。そんな、小さな成長を間近に感じ、本当にこの子は生きていたんだ。と改めて思った。そして、隣りの手術室へと移動した。

私は診察台に寝て、そこには、医師と看護師2人がいた。一人の看護師は、私の右手を握り、もう一人は私の左手に麻酔を射とうとしている。看護師から、「今から麻酔をかけますよ。私と一緒に声を出しながら、ゆつくり、1、2、3、4…と数えて下さいね」と言い、左手の静脈にゆつくりと針が刺さる。私は声に出しながら、「1、2、3、4…」と看護師の手を握りながら数えていった。どれくらい数えたのだろう。私は11を数えるまでは覚えているのだが、知らない内に麻酔が効いて、すっかり別世界にいた。かすかに聞こえる医師と看護師のやりとり。ここがどこなのか分からない。

私は診察台に寝たまま、その病院の奥にある勝手口のような所まで滑り台に乗っているかのように、すーっと流れて行き、その勝手口が自然とバツと開いた。もちろん、普段そんな勝手口から出入りしたこともなければ、そこにドアがあるのかさえも知らない。私はその勝手口から飛び出ると、たちまち追い風を感じるように、風に押されてグリーンと上に昇つていき、ふわーっと浮き始めた。

やがて、その病院の屋上であろう場所にすーっと辿り着くと、そこからはとつてもきれいな景色が広がっていた。体は診察台に乗ったまま、ふわふわと浮いていて、少し前に体を起こすと、そこには、とても広くて、雲一つない、きれいで優しい水色の空が広がっている。その空の下には、とっても大きくて水平線も見えない、柔らかな波音を立てる雄大な海。その周りは、自然があふれ、生い茂った木や、かわいい植物がたくさん見える。

ふと隣りを見渡すと、まるで地中海沿岸のような高台にある、かわいらしい街並み。そこにはたくさん白い建物が建っていた。その空間に辿り着くと、どこからかワルツが流れ始めた。心地よい音楽に身も心も預け、「うわー、きれいだなあ」と、今まで感じたことのない、とても感動的で幸せな空間だった。

このワルツのリズムに乗って、あの街並みの方へ近づきたいなあと思っていると、思いとは別に、その診察台は、またゆったり、ゆらゆらと上昇していった。「あー、あっちに行きたかったのに残念だな」と思っていると、随分と上空にいた。少しずつ酸素が薄れていくのか、少し緊張感のようなものを感じた。でも、まだどこからか流れているワルツ。すると、そのワルツと一緒に誰かの声が聞こえてきた。「…さん、…まさん」、「西山さん、聞こえますか、西山さん！」

私は、看護師から名前を呼ばれ続けていたようだ。私が、「…ああ」と言葉にもならない返事をする、看護師たちは、「お気づきになりましたか、もう終わりましたからね。今から別のお部屋に移動しますよ」と色んなことを言っていたような気がする。

私は、返事をしたのか、していないのか、ひたすら口を開けたまま、「…ああ」と言っていた。

どれくらい手術に時間がかかって、その後どれくらい寝ていたのだろう。目が覚めたかと思うと、途端に胃液を吐き出し、そんなことに起こされた。まだ、意識は朦朧（もうろう）としており、視点も定まらず、急に怖くなった。必死に、「手が動かない、お願い、動け！」と強く思いながら、必死に手の感覚を探った。ようやく指が自分の意思でピクンと動き、ホッとした。

そして、ゆっくりとナーズコールのボタンを押し、看護師を呼んだ。「どうされましたか」とすぐに病室に来てくれて、自由に動かない体を少し傾け、吐いてしまったところを片づけてくれた。「完全に麻酔が切れるまで休んでいて下さいね」と言われ、看護師は部屋を出て行った。看護師が病室を出ると、また少し眠りにつき、どうしてもさっきの夢の続きが見たかった。もう一度空を飛んで、あの空間に行きたい。

どのくらい時間が経ったのか、また目を覚ますと、身体がすごく重たかった。重力にどんと引き寄せられる感覚。そして、病室からはセミの鳴き声がじわじわと聞こえてくる。「ああ、現実に戻ったんだ。もうお腹の子どもはいないんだ」と、どこかで寂しいと思う気持ちと現実が入り混じり、少し複雑な心境だった。

時間が経つに連れて、だんだんと手足が思うように動かせるようになり、身体も重篤感から解放されていき、あの空間で起こった出来事を思い返していた。私はきつと、最後の最後まで子

どもと一緒にいたかったから、空の途中までついて行き、見送ったのかもしれない。最後に上昇したときの感覚。もしかしたら、そのとき、一人で天に昇る我が子ときちんと別れを告げ、ワルツに乗ってこちらの世界に一人で帰ってきたんだらうと思った。

もしかすると、私は我が子を見送りに行き、帰りは我が子が私を見送ってくれたのではないか。それは、どこか確信にも似た感情だった。すると、とても穏やかな気持ちになった。我が子はきっと、いずれまた私たちの元に来てくれる。

母から伝わる温もり

何時間経ったのか、看護師がまた病室に来ると診察室に移動し、術後の診察を受けた。医師は、「今のところ傷口も大丈夫みたいですね。もう今日は帰宅して大丈夫ですよ」と言った。

私は、付き添いで来ていた母の元へ戻ると、「大丈夫やった？はるちゃんが手術受けてる間、ずっと携帯で菓を飲みながら妊娠した人のブログとかサイトとかいろいろ見ててんだけど、やっぱりな、今回はおろして良かったと思うで、だってな…」といろんなことを教えてくれた。きっと母も、私に後悔させないために、また、母自身が自分に言い聞かせるために、いろいろな情報を見ていたのだろう。

でも、もうすでに、あの空間での出来事や目覚めてから感じたこと全てを悟った私は、「今回は手術して良かったと思ってるし、きつとお腹にいた子も、私たちのこと理解してくれてると思う」と言った。すると母は、「いや、やっぱり、今回の手術をあん

た達の気持ちもよく考えんと一番に決めたのはママやったから」と無事に手術が終わって安心したのと、この一週間、母親という立場で厳しくしていたことの緊張もほぐれたのか、涙を少し流しながら話してくれた。

手術して帰宅した夜はお風呂に入れなかった。しかし、嘔吐したときに髪の毛に胃液がついてしまい洗面所で髪の毛を洗おうとしていた私は、シャンプーやリンスを用意していると、立ちくらみがひどく、その場に尻もちをつき、転んでしまった。術後には頭痛や発熱、その他にもいろんな症状が現れると聞いていた。母は、その転んだ音を聞いて、私のところにやってくる、「もう、ママが洗ったるか」と言い、私は十何年ぶりに母に髪を洗ってもらった。

母の指先の感覚や洗い方から、自分の幼少期を思い出した。シャンプーが目に入ると痛いからと言い、必死にタオルで目を押さえて洗ってもらっていたこと。なんだかとても懐かしかった。髪の毛を洗い終え、髪も乾かしてくれた。私は、母の手から伝わる温もりに、懐かしさや優しさ、母娘という絆を深く感じた。もし、そのまま子どもを出産していたら、私はここまでできていただろうか。24にもなつて、母が子を想う気持ちをどんどん裏切っていく娘。

もちろん母も、私を育てていく内に、だんだんと母親になっていったのだろうが、私が手術の前に考えていたことは、子どものことではなく、ほとんどが世間体や自分のこと。私には、やはり母親になるという覚悟が全然足りていなかったようだ。

手術を受けてから一週間後、術後の経過観察として、もう一度診察の予約が入っており、この日は彼に病院に連れて来てもらった。医師からも、完全に摘出されているという報告を受け、私も彼も少し心が落ち着いていた。両家を巻き込み、みんながたくさん悩み考え、みんなでお腹の子どもを必死に想っていた、騒々しい一週間が少しずつ終わっていく。私たちは、診察の会計を済ませると、病院を後にし、予約していたお寺へと向かった。私たちは、我が子がこの世にいつまでも未練を残さないように、手術の一週間後に水子供養の予約をお寺でお願いしていたのだ。

お寺では、水子供養とは、という話を住職さんから聞いた。この話はきつと宗派によって違うのだろうが、お話の中に、「水子というと、単にこの世と縁がなかったと思われがちですが、それは違います。必ず縁があつて、あなた方の元へやってきたのです。どうぞ、この世に縁がなかったとは思わず、気持ちは必ず届くので、生まれてこなかった子を思いながら焼香して下さい」と言われた。

お経の中盤にさしかかると、住職さんは、焼香の合図を私たちにそつと示し、彼から順番に立ち上がった。柔らかく揺れる、ろうそくの火が灯り、線香のけむりと一緒に天に昇って行くのだろうか。私は、

「この世に縁がなかったなんて嘘だということは、私たちが一番分かっているよ。たった一週間でしたが、あなたは私たちにたくさんのことを教えてくれましたね。彼との絆や、

家族との絆を強くさせてくれた。あなたは愛を教えてくださいました。たった一週間だったけど、あなたは大きくなろうとしていましたね。だから、縁がなかったなんて、決して思いませぬ。ありがとう。またね」

と手を掌わせながら焼香を行った。続いて、外での焼香に移った。その日は夏によく見る、もくもくとした入道雲もなく、まるで、手術中に見た空と同じような、雲一つない、優しい水色の空が広がっていた。私は、「ああ、あのとき見た空は、今日の、この日のことだったんだ」と思い、あの日の現象はやはり、私が空まで我が子を見送ることができたと感じた。そこでもお経を唱えてもらい、エコー写真と手術の前日に綴った、天に昇る我が子への最初で最後の手紙を住職さんに渡し、水子供養は終わった。

そこのお寺は、訪れた1か月分の子どもたちを、毎月決まった日にちに一斉にお焚き上げするらしく、私は帰る直前まで手を掌わし、「みんなと一緒に空へと行くんだよ。決して迷子にならないでね」と心の中で何度も何度も繰り返した。

手術中に感じた様子。きつと我が子は迷子にならないだろう。空に帰り、またこれからも、もう一度、この世に生を受けるまで、私たちのことを見守っていてくれるだろう。そして、子どもと私たちの想いがもう一度重なったとき、今度は必ずこの世で、私たちの子どもとして、見ることができなかった、お顔を見てみたい。小さい手を握りたい。そして、その命を彼と二人で永遠に守っていきたいと思う。